

論文内容要旨

論文題名 硫酸フラジオマイシンの感作率に関する検討

掲載雑誌名 昭和学会雑誌 第79巻 第5号 2019年

専攻名 内科系皮膚科学 濱田 裕子

内容要旨

現在、医療用抗菌外用薬としてアミノグリコシド系、テトラサイクリン系、リンコマイシン系、クロラムフェノール系、ニューキノロン系などの薬剤が用いられている。フラジオマイシン、ゲンタマイシン等のアミノグリコシド系抗菌剤を含有する外用薬は熱傷を含む創傷や感染性皮膚疾患の治療、術後創傷処置などに汎用されている。このうち硫酸フラジオマイシンは感作能を有しているため、アレルギー性接触皮膚炎の代表的な原因物質を網羅しているジャパニーズスタンダードアレルゲンにも含まれている。この硫酸フラジオマイシンの感作率および感作原を検討する目的で10年間のパッチテスト結果を検討した。対象は2009年5月より2018年5月までに昭和大学病院附属東病院、横浜市北部病院、藤が丘病院の皮膚科外来を受診し、硫酸フラジオマイシンのパッチテストを施行された242名（男49名、女193名、平均年齢52.4、SD±18.7歳）である。パッチテストは試薬を背部の健常皮膚に貼布し、2日後に除去した。判定は貼布2、3、7日後にICDRG (International Contact Dermatitis Research Group) 基準に基づいて行い、7日後に+~+++と判定された者を陽性とした。陽性反応が認められたのは14名（陽性率5.8%）で、男性に比して女性で高値であった（4.1% versus 6.2%）。陽性者の平均年齢は61.8歳で、年代別では60~69歳の陽性率が最も高く（9.8%）、以下、50~59歳（8.6%）、40~49歳（7.0%）、70~79歳（6.5%）の順で、40歳未満には陽性反応は認められなかった。陽性者14例中10例（71.4%）が接触皮膚炎の患者で、全例で顔面に皮疹が認められた。そのうち眼囲に皮疹が認められた8例は、いずれもステロイドと硫酸フラジオマイシンを含有する眼軟膏による治療歴を有していた。硫酸フラジオマイシンの感作者が高齢者に多いのは医療行為、特に眼軟膏によって感作が成立した可能性が高い。本邦における陽性率は米国（11.4%）よりは低いものの、ヨーロッパ諸国（2.6%）と比較すると高値で、フラジオマイシンを含有する外用薬を減少させたカナダでは感作率も著

明に低下している。また、硫酸フラジオマイシン感作者では、硫酸ゲンタマイシンなど他のアミノグリコシド系抗菌剤にも交叉感作を生じることが知られており、感作者は以降の外用薬選択にも注意を要する。抗菌薬については主に耐性菌出現の危険性から内服薬の使用法に関する検討がなされてきたが、経皮感作という側面から外用薬の選択にも注意が必要であることを指摘した点で新知見を与える研究と考えられる。